
さえない俺と仮面ライダー

焰の錬金術師ラビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さえない俺と仮面ライダー

【Nコード】

N5350P

【作者名】

焰の錬金術師ラビ

【あらすじ】

あるさえない中学^{じんの}三年生神野 恭^{きょう}そんな彼がたどり着いたのはなんと、仮面ライダーの世界だった！？
ドタバタ動くみんな！！そして彼は元の世界に返れるのか！？

俺！！参上！？

はあ・・・憂鬱だ、こんなにも憂鬱だなんて思ったことがない。

だって俺は常にネガティブに考えてるからさ！！

HAHAHA！！悲しくないぜ！！

と、まあこんな感じで良いか・・・、おっと、書き忘れてた、俺の名前は神野 じんの 恭 きょう

ガッツリとした中学三年生、今年の春にはもう受験！？わお！！やばいぜ！！

まあ、こんな俺も頑張れば高校生かー周りはバカにする連中ばっかだけ

俺は頑張るぜ！！夢にめがけて！！なんつつてなー

ついでに付け足すと俺の決め台詞は

「俺！！参上！！」だ！！まあどつかで聞いたことはあるだろう！！
そして、ちよつと逃げたいなーなんて思ってたら、こんなことになるなんてー！！

最悪なのか幸運なのかわかんねー！！

地震！？地割れ！？闇の中！？

「俺！！参上！！」

と、これまたお決まりのセリフを俺は飽きもせずにかんた、当然なことだが、クラスメイトからは冷たい視線、そんな時藤木 リヨウヤ（ふじき りょうや）がこれまた冷たい視線で

「お前何やってんの？」

・・・うんまあ 覚悟はしていたさ！！そんなことを言われるであろう言葉はな！！

「はあ・・・ねみい・・・だつて、こうでもしねえと、眠気とばねえんだもん」

叫んだ直後のテンションじゃねえだろお前！！というような視線が俺を串刺しにする

が、そんなものいつものこと、痛くもかゆくもないぜえ……！！

「つてか、ほら神野、かえろーぜ」

リヨウヤに言われて俺はかばんを持って教室を出ながらリヨウヤと話していた

「つてかさー俺らもうすぐ受験生かー早いねー」

「お前はとうせ落ちるだろ？ 神野」

「うるせーよ、バーカ」

<あはははははははははは・・・>

と笑いながら帰っていると

「神野、藤木、待って――！――！――！つか助けて――！――！」

と、叫び？なのかな？とりあえず大声が発されたのでそちらをみて見た

そこにいたのは双子だった、

園崎 セイガ(そのざき)と園崎 悠河

だった、こいつらって、マジにってるねえ。

「どうしたの？セイガ」

「いや・・・ちょっと待ってって言ったのに・・・はあ・・・ツ先に・・・はあ・・・はあ・・・いくからさ」

「イヤだっておせーんだもん」

「ヒドー!!」

とまあこんな感じに俺らの日常が過ぎていく、はずだった・・・

<ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ>

「んえ！？地震！？」

リヨウヤが驚き叫んだ。

「いや・・・そんな・・・うわー!!」

地面が割れた。・・・俺ら死ぬ？

「え？チヨー!!うわあああああああ!!!!」

そう叫び、俺たちは、深い闇に落ちていった。

そして落ちてる中、俺は不思議な光景をみた、

俺らと同じ世界が何十、いや、何百、何万とあったのだ。

「これって・・・」

俺が考えて気がつくと、リヨウヤも、セイガも悠河もいなくなっていて

俺一人だった

「嘘！？え！？ちょっと冗談じゃない!!」

・・・まあさけんだって無駄だったんだよねこれが、すっかり落ちてったし。

「うわあああああああああ!!!!」

そして、俺の目が覚めたときには、そこは普通の世界だった。

さっきまで俺達が帰っていた道だった、それなのに、

何かへんだった、ちょうど看板があったので見てみると

ここは「金関市」のはずなのに看板のしるしは

「A-111」だった。

「なんだ・・・ここは」

そう一人でつぶやきながらとりあえず歩いていく

かばんは落ちてるときにどっかに吹っ飛んでしまっただけだ。今は学ランだけだ。

普段一人でいることが多いため、そこまで淋しいとは感じなかったが不吉な予感を感じた。

そして、それが現実になるなんてねえ・・・不幸だよ全く・・・

はい！！キャラ設定のご紹介！！唐突でスイマセン！！www

神野 恭とにかく笑ってばっかである少年、基本は皆から冷たい視線を浴びているが今となってはどうでもいいと感じてしまう、決めゼリフ的な言葉は「俺！！参上！！」だが、これをやると絶対クラスメイトから冷たい視線を浴びる。

昔陸上をやっていたので体力には自信がある、だが、短距離はきらいだ、長距離派なのでね。

藤木 リヨウヤ（ふじき りょうや）中学校に入って恭と知り合った少年、怒ると怖い、基本は、恭のことをバカにするヤツだ。

園崎 セイガ 悠河（そのざき せいが ゆうが）セイガが兄で悠河が弟、といっても双子だからそんなに大差はない、恭とリヨウヤとは友達の仲だ。

以上！！

地震！？地割れ！？闇の中！？（後書き）

やっぱり上に全部書いちゃいましたwww

仮面ライダークウガ

なんだ？この世界、ありえねーってかファンタジー過ぎるだろ！！
どういうシュチュ？ありえねえ！！

ってか誰もいねーのカーー！！！！

と、少し荒れてたとき足に何かが当たった。

「ん？なんだこれ？」

俺はそれを開けた、といつても元々半開き状態だったので
当たった衝撃で開いたのだ。

「これって・・・ベルト？・・・仮面ライダーの？」

それは、「仮面ライダークウガ」のベルトだった、

ケース自体がボロボロの癖にベルト自体はピッカピカだ。

「これつけてヘンシーンってか？バツからし」

といいながらふざけ半分でおなかのところにベルトを当ててしまった

その瞬間！！

<ツシュ！！>

あらまビックリ！！ベルトが俺の体の中に入ったのだしかも、もの
すごく痛い

「いたたたたたたたたた！！！！何これ！？一体なんなの？もう
やだー！！」

不幸だなあこれ、と、思っているとその瞬間！

<きゃー>

女の子の悲鳴が聞こえた、その悲鳴に俺は興味本位で見に行っ
てしまった。

そしてその目の前に合ったのは、化け物・・・というか

「仮面ライダーカブト」に出てくる化け物<ワーム>だった。

<ワーム>は基本はさなぎの状態で手足がついていて、でも思えばそれだろう

そして、熟すとさなぎから成虫になるのだ。

そして、ワームの目の前にいたのは小さな女の子だった、そして、それを見た瞬間、

俺は無我夢中になってワームにけりを入れた、とび蹴りだ。

<グギャ?>

ワームがこつちを向いた・・・キモイ・・・

「うせる!! キモいんだよ!!」

・・・今考えてみると俺はバカだ、言葉がわかってるのかもわからないのに罵倒をしたのだ。

ってか言葉わかってても殺されるだろこれ。

<ぐぐぐぐ>

うなりながらのつめで俺を引き裂こうとした、がそれを俺は右手で止めてしまった。

これで右腕は落ちたか、と思ったら

<バキン>

と、鈍い音を立ててワームの爪が割れた

そして俺の手には、見た事のない装備がついていた。

そんで思い出した、仮にもここが平行世界なら、仮面ライダーの世界ならば!!

ちよつと恥ずかしいけどいつものことだ!!

「あーやっぱ言うのかな? つま、迷ってる暇はない!!」

そついつて、大きくいき歩吸い込み

「変身!!!」

そうさけんで、ベルトの横のボタンを押したとき

<シュン>

真っ白のクウガの出来上がり。

「ッてこれいちバン弱いフォームじゃん！！こんなんで戦えるのか？」

と、試行錯誤しているうちにフォームが襲ってきた。

「よつと」

軽く交わす、そんで持って、思いっきり拳を握って殴った。

<ドゴー！！>

っあ、フォームの背中へ込んだ、スゲ。

「うらあああああああ！！！！」

思いっきり今度は蹴飛ばした。

<ぐううう>

「これだとどめだあああああ！！！！」

と、まあこんな感じに叫んだ瞬間

真っ白だったからだが、真っ赤に染まった。

そして、その姿こそがクウガのデフォルフォーム「マイティフォーム」だった。

そして右手に焰をまとい、思いっきり殴った。

<ぐううああああああつあ！！！！>

と、叫んだ割にはいがいとあっけなかった。

そして、フォームの残骸を見ながら俺は思った。

・・・仮面ライダーって、ヤッパリ超かっこいい！！！！ってな。

仮面ライダークウガ（後書き）

いやークウガ！参上ってな！！

秋野 仁「仮面ライダーカブト」

かつこいいい！！仮面ライダー超最高！！

マジかつこいいい！！しかも俺の大好きなクウガだぜ！？

ほんと・・・ほんと・・・

「マジでサイツコ・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！」

俺は誰も見ていないと思って叫んだが、ここは街中だ

ワームを倒して人も戻ってきている、となれば

・・・ヤッパリ冷たい目線の的だった・・・

か、悲しくないんだからね！！悔しくなんて無いんだからね！！

そんなツンデレ感傷に浸りながら歩いていると

<ああ！？もっぺん言ってみろコラ！！>

と、いかにも柄の悪そうなやつが俺と同じ年であろう男の子に絡んでいる

ついでに言つとそいつの後ろに小さな女の子が居る歳は・・・小学2年生ぐらいだろう

つていうかあの男の子どつかで・・・

と、いうか、あの男の子・・・どつかで？

そう考えているうちに、そいつ等の騒ぎ声が聞こえた

『だからもっぺんに言えつつつてんだろうが、このクソガキ！！』

「うるせーよ！！だから何度も言つてんだろ！！まだ小さい女の子だぞ？ん何切れんなバカ！！」

『ああ！？そのガキが俺の服にジューズぶっ掛けたんだぜ？だからクリーニング代の10万出せって言つてんだよ』

「だから子供にんな金出せるか！！っつーか絶対五千円レベルだししみにもなつてないだろ！！」

『いいのか？俺たちは全員仮面ライダーなんだぜ？』

「っは！！全員つてお前だけだろ！！」

『いやいや、でて来い！！お前ら』

不良が手を鳴らしたらざつと10人くらい不良が出ていた。

・・・ぶつちやけよう、今時こんな悪党がいるのに俺はドン引きだ。しかしそれにもクツせず男の子が言った

「はぁ？お前らがライダーってマジ受けるんですけどあははははははは」

『このガキ！！俺たちは量産のライオトルーパーだけど数で勝負なんだよ！！』

「うつせえ雑魚が！！雑魚はどんなに数があっても雑魚だ！！」

『んだと！？コノヤロウガキもろとも殺してやる！！』

不良ドモがいつせいに『変身！！』と、ライダーになった。

俺は危ないと思ってベルトを装着して走り出した、が、その時

「はぁ・・・こんな街中で変身させんなよ・・・来い！！カブトゼクター！！」

と男の子が手をかざすと、カブトムシの形をしたビークルが飛んできた、

そしてそれを？み男の子は

「変身！！」

そのゼクターをベルトに向かってスライドさせてベルトと一体化させた。

<ウィーン・・・ヘンシン>

ベルトからそのコトバが発せられたとき

男の子の体が仮面ライダーになった、

イカに重そうなそれは「仮面ライダーカブト」の「アームフォーム」だ

本当の力は

あのベルトの角を逆にスライドさせて発動させる「キャストオフ」だ。

男の子もそれを知っているのだろう

角に手をかけ

「<キャストオフ>」

<ウィーン・キャスト・オフ>

<バー・・・ン>

カブトのアーマーが吹っ飛んで真のかぶとの姿をあらわにした赤い装備、それこそが真の仮面ライダーカブトだった。

「おら、かかつて来いゴミドモガア!!」

『おお!!!!』

不良たちが襲い掛かった、が、そのうちの一人を

蹴飛ばした、もちろんそいつは吹っ飛んだ

その瞬間一瞬の隙が出来た、それを流石は不良といえどもライダー見逃さなかった

『くたばれえ!!!!』

そう言つて、剣でカブトの背中を切ろうとしたとき

俺は動いていた、そいつがカブトをきろうとした時にはもう俺はそこにいた。

「変身!!」

叫びながら剣を右腕で受け止めた。

「ん?だれだ?」

「話は後!!今はこいつらだ」

俺はそういつて剣を持つてる奴を焰の拳で吹っ飛ばした

『うわあ!!!!』

「カブト!!決める!!」

「OK!!誰かわかんないけど協力感謝!!」

そしてベルトで力を溜めて

「ライダーキック!!」

<ウィーン・ライダー・キック>

「うおらあ!!」

思いつきり回し蹴りをした、5人に当たつてそいつらが吹っ飛んだ。

『ウワアアアアアああああああ!!!!』

ドーンと、情けなくベルトが壊れた。

『うわ!!ヤベこいつらヤルゾ?』

『逃げるか？』

と、不良ドモが逃げようとしたのを逃がさない

「逃がすかバカー!!」

俺はさけんで、足に力をこめて

「オラア!!ライダーキック!!」

残りの五人にかかと落とし式のキックをかましてやった。

『ウワアアアアアアアア』

あれ?なんかさつきも同じような光景を見たような?

『くっそ!覚えてるよおおおお!!』

ものの5分で負け犬の完成だ。

「助けてくれてありがとう、俺の名前は秋野^{あきの} 仁^{ひとし}ヨロシクな」

「あぁってか仁だったのか」

女の子はまだ、仁の足元で震えている。

「え?ッてかこの声・・・恭?」

「そーだよー(笑)」

「(笑)って口で言う奴初めて見た」

「いやそれが俺だし」

そして、女の子が泣きながら仁にお礼を言った

仁は超照れていた。

「しっかしまたお前に会えるなんてねー6年ぶり?」

「そだねー」

そっ、俺と仁は6年前に家が隣という理由で仲良くなった幼なじみだ、また会えるなんて思わなかった。

「あー後はたけるとリヨウタとまひろか」

「そだねー」

ちなみに言うと

園崎たける(そのざき たける)、間宮 まひろ(まみや まひろ)
、神刀 リヨウタ(かみがたな りょうた)

こいつらもそのときに無茶苦茶仲が良かった仲間だ。
もしかしたら会えるかもしれない。

「で、どうする？」

と、仁は聞いた

「あれ？ここって空き家？」

「うんそうみたい」

そこは俺達が暴れたすぐその事務所みたいところだ。

「そうじゃない？なんで？」

「いや、前に話したじゃん、もしも世界が大変なことになったら俺たちで部隊を作って戦おうってさ

たしか<JOKER>って名前でさ」

「ああゝあつたねゝそれ、ってまさか！！」

「やつちやおうぜ、俺たちで、<JOKER>を！！」

そして完成したのが<探偵事務所JOKER>だ、これから俺たちの
仮面ライダー生活？ガ始まるのだった、なーっはっはっはっはっは！！

秋野 仁「仮面ライダーカブト」(後書き)

いやー長くなっちゃたWWW

探偵事務所 JOKER

「やつちやたねー仁もとい姉様」

「そーだねー恭もとい兄様」

俺たちはなぜか自分達を姉様、兄様と呼んでいた俺はともかく、仁は男なのになあいいのかなあ？

「しっかし俺たちの本職って行ったら、ねえ、兄様」

「そうだねえ、基本化け物退治だもんねえ姉様」

「それじゃあやりますか、兄様」

「そうだね、姉様」

・ ・ ・ ・ ・
呼びずええええええええええ！！！！

何これ！？何で男を姉様よばわり！？

一体どういう傾向！？

などと考え込んでるうちに、ドアが開いた。

「あの一探偵事務所ってここですか？」

「え？ええそうですよ、姉様、依頼だよ」

「え？ああ！どうも兄様なんか行ったら？」

「あのお姉様、兄様って……オカマですか？」

「そんなわけありません!!」

ひどい勘違いだった。

「で？ 依頼は？」

俺が仕切りなおして聞くと

「はい・・・彼氏を・・・探してほしいんです」

そういつて、写真をだしてきた

「姿を消して……もう一か月なんです」

「姉様、OK?」

「兄様が決めていいよ」

「んじゃ、いいですよ、この町は俺たちの楽園だ、そこで誰一人、
ないで欲しくねーんだ」

ちょっとかつこつけてみた、いいじゃん知り合いじゃないんだし。
「はい・・これが番号です、何かあったら電話ください」
「はいよ、それではまた」

そんで始った人探し！！探偵っぽくていいねえー！！
と、俺は悦に浸っていた。

「それより兄様？誰なんですか？探し物は」

「流石にその口調はやめてくれ姉様」

「わかったよ兄様」

「えーっと、探し人は、戸川 とがわ 了輔 りょうすけ 24歳、洋服店＜フレームフラ

ワー＞に勤めていたがリストラにあい姿をくらまして一か月つてこ
とぐらいだなー」

「それだけわかればいいんじゃないの？人探しには十分な材料だよ」

「だよなーってか何だあれ？」

「ん？」

僕らが眼をくらましたその先には

マグマをまとった怪物がいた俺はもちろん知っている、仮面ライダー
ー大好きだし。

確かアレは「ドーパント」ガイアメモリで出来上がった超人だ、し
かもあのメモリは「マグマ」

さしずめ「マグマド・パント」ってところだろう。

マグマドーパントが手をかざした、そこからマグマの球体がでてきた

「げー！！」

「いやべー！！」

<ウウウウあああああああ！！！！>

マグマドールパントが球体を飛ばしてきた

が、それを俺らはギリギリ交わす

「くっそー!!」

「やるかコラー!!」

そういつてベルトを装着したがそこに奴の姿は無かった。

「なんだったんだろっ、姉様？」

「さあね、きよ、じゃなかった兄様」

「別に恭でもいいぜ？」

そして、また戸川を探しに戻った

探偵事務所JOKER（後書き）

いやー仮面ライダーさいこー

二人の仮面ライダー

「戸川・・・いないなあ」

ドーパントに襲われて勢いを失ったと思ったら
全く持つてそのとうりだった。

「まったく！！一体何がどうなってんだよ！！」

そう考えながら歩いていたら

「あれ？兄様？あれって戸川じゃね？」

仁もとい姉様が指差した方向には確かに戸川がいた
だが何でだろう？顔色が変だ。

「戸川 了輔、だな？」

オレが聞くと、戸川が。

「おまえ・・・だれだ？」

「俺は私立探偵の・・・」

ここまで言ったら

「うるさい、邪魔する奴は燃えろ！！」

その時、戸川の手になにかが握られていた
ガイアメモリだった

＜マグマ＞メモリから発せられた声

それは先ほど俺たちを襲った

マグマドーパントのメモリだった。

「っな！！」

「やっべー！！」

しかし戸川はもうドーパント化していた。

「くそ！！兄様！！」

「わかってるよ！！姉様！！」

『変身！！』

俺と仁、ふたりでいつせいに変身した。

「うおおおお！！」

「やったるぜえええええ!!」

俺たちはマグマドーパントに向かった

奴はまた焰の弾を溜め始めた

「させるか!!」

俺はその脚を思いつき蹴飛ばした。

「うがつ!?!」

ドーパントがバランスを崩しよろめく、そこを仁は見逃さない

「喰らえ!!」

カブトはキック力が結構強い、それを踵落としと来たもんだ、結構ダメージはある。

「ぐハッ!!」

ドーパントはつぶれた、が、すぐさま両手から焰の弾が乱射されたそれに当たって俺たちは倒れた。

「いて!!」

「がつは!!」

俺たちはうずくまった、それをまだドーパントは弾を連射する。

「いたたたたたた」

「痛いってか熱い!!」

<ああああああああ!!>

突然ドーパントの攻撃がやみ空に向かって咆哮をあげた。

「なんだ?」

「わからない」

俺たちが見ていると、ドーパントの手からまたもや馬鹿でかい焰の玉が出てきた

しかもあのときよりも比べ物にならないくらいデカイ

「あんなん喰らったらやべーよ兄様!!」

「この状況でその呼び方はやめる姉様!!」

・・・やめろって言ってこの有様じゃあアウトかな?

「こーなったら、やる?兄様?」

「賛成、姉様」

『行くぜ!!』

俺たちは走りながらジャンプしたドーパントに向かって……

『うおおおおおおおお!!』

そして、

『ライダーキック!!!!』

「あああつあああああ!!」

ドーパントが焰の弾を繰り出した、それと俺たちのキックが重なって

『うおおおおおおおお!!』

打ち勝った!!当然!!

「があああああ!!」

俺たちのキックがドーパントを貫き倒した。

「が……は……」

戸川の腕からメモリが出てきた、そしてそのメモリが砕けた

「……あ……」

その時

<ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ>

地面が揺れ、中からティラノサウルスが出てきた!!

二人の仮面ライダー（後書き）

とくにないっすね

ドーパントの存在理由

「げー！ティラノサウルス！？」

俺は声を上げた、だって恐竜だぜ？

「ちがうよ兄様！！こいつもドーパントだ！！見ろ！下半身がコンクリートだ！」

その意見を聞いて俺は冷静さを取り戻した。

あの顔、コンクリートの下半身、こいつ！

「こいつティーレックスドーパントだ！！」

そう、こいつのメモリは<ティーレックス>だ。

「でも・・・なんで！？」

「知るか！！」

そして、俺たちはドーパントに向かって走り出した。

「くらえええええ！！」

俺は殴りかかったが、奴は地面にもぐって逃げてしまった。

「くそ！！」

「逃がした！！」

俺たちは地団駄をふみ、戸川を警察に引き渡して事務所に帰った。

「結局、なんだったんだ？」

仁もとい姉様が問う

「知らないよ」

俺はそっけなく答えた

「そーかーでも一体・・・」

そこまで仁が言ったとき扉がバタン！！と大きな音で開いた

「オイ神野！！ここに居たのか！！」

そこにいたのは、藤木 リョウヤだった。

「リヨウヤ！！どうしてここが？」

「あーあんだけ騒いでりや誰でもきずくよ」

あれ？俺ってそんなに騒いでた？

「そんなことよりも早く！！ドーパントが暴れてんだよ！」

『んな！！』

俺たちには心当たりがある、まさかくティーレックス？！？

「どこだ！！」

俺はリヨウヤの胸ぐらをつかみ聞いた

「あ、あっちだよ、バカに顔がデケエティラノサウルスのドーパントだ！」

『ヤツパリか！！』

俺たちは急いでそっちに向かった。

「いたよ・・・」

「いたね・・・」

俺たちはあきれていた、だって普通に暴れてんだもん。

「はあ・・・はあ・・・やっと追いついたよ・・・」

リヨウヤが追いついたみたいだ。

「そんなことよりあいつって」

仁が恐る恐る聞く

それを俺が変わりに聞いた

「おい！！ドーパント！！貴様はだれだ！！」

その問いにドーパントは変身を解いた、そしてそこにうつったのは、依頼人だった。

「どうして・・・貴方が」

「教えましょうか？」

依頼人は笑いながらはなした

「私もね、最初は何のためにガイアメモリがあるのか？ってね、その答えは変身したらわかったわ、これは私達の欲望をかなえてくれる！！そのためのものなのよ！だから私はドーパントになる！！」
カシャ、と、依頼人はメモリを首元に挿した

「あああああああ！！！！」

依頼人は、ティーレックスドーパントになった。

「くそ！！行くぞ！！兄様！！」

「おっけー姉様！！」

そんな時リョウヤが

「そんじゃ俺たちも」

「いきますかー！！」>

と、リョウヤの中からも声がした

「だれ！？」

俺がビツクリして問うと

「モモタロス（笑）」

「って、お前もライダー？しかも電王！？」

「くそのとうり！！」>

モモタロスとリョウヤの声が、重なった。

ドーパントの存在理由（後書き）

最近批判されまくりで精神的大ダメージ
WWW

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5350p/>

さえない俺と仮面ライダー

2010年12月25日20時56分発行